

きりぎりす

太宰治



おわかれ致いたします。あなたは、嘘うそばかりついていました。私にも、いけない所が、あるのかも知れませんが、けれども、私は、私のどこが、いけないのか、わからないの。私も、もう二十四です。このとしになつては、どこがいけないと言われても、私には、もう直す事が出来ません。いちど死んで、キリスト様のように復活でもしない事には、なおりません。自分から死ぬという事は、一ばんの罪悪のような気も致しますから、私は、あなたと、おわかれして私の正しいと思う生きかたで、しばらく生きて努めてみたいと思います。私には、あなたが、こわいのです。きつと、この世では、あなたの生きかたのほうが正しいのかも知れません。けれども、私には、それでは、とても生きて行けそうもありません。私が、あなたのところへ参りましてから、もう五年になります。十九の春に見合いをして、それか

らすぐに、私は、ほとんど身一つで、あなたのところへ参りま  
した。今だから申しますが、父も、母も、この結婚には、ひどく  
反対だったのでございます。弟も、あれは、大学へはいったば  
かりの頃ころでありましたが、姉さん、大丈夫かい？ 等と、ませた  
事を言つて、不機嫌ふきげんな様子を見せていました。あなたが、いや  
がるだろうと思ひましたから、きょうまで黙つて居おりましたが、  
あの頃、私には他に二つ、縁談がございました。もう記憶も薄  
れている程なのですが、おひとりは、何でも、帝大の法科を出  
たばかりの、お坊ちゃんちゃんで外交官志望とやら聞きました。お写  
真も拝見しました。楽天家らしい晴やかな顔をしていました。  
これは、池袋の大姉さんの御推薦でした。もうひとりのお方は、  
父の会社に勤めて居られる、三十歳ちかくの技師でした。五年  
も前の事ですから、記憶もはつきり致しません、なんでも、

大きい家の総領で、人物も、しつかりしているとやら聞きました。父のお気に入りらしく、父も母も、それは熱心に、支持していました。お写真は、拝見しなかつた、と思います。こんな事はどうでもいいのですが、また、あなたに、ふふんと笑われますと、つらいので、記憶しているだけの事を、はつきり申し上げました。いま、こんな事を申し上げるのは、決して、あなたへの厭いやがらせのつもりでも何でもございませぬ。それは、お信じ下さい。私は、困ります。他のいいところへお嫁に行けばよかつた等と、そんな不貞な、ばかな事は、みじんも考えて居りませぬのですから。あなた以外の人は、私には考えられませぬ。いつもの調子で、お笑いになると、私は困つてしまいます。私は本気で、申し上げているのです。おしまい迄までお聞き下さい。あの頃も、いまも、私は、あなた以外の人と結婚する気は、少

しもありません。それは、はつきりしています。私は子供の時から、愚図々々が何より、きらいでした。あの頃、父に、母に、また池袋の大姉さんにも、いろいろ言われ、とにかく見合いだけでも等と、すすめられました。私にとっては、見合いもお祝言しゅうげんも同じものの様な気がしていましたから、かるがると返事は出来ませんでした。そんなおかたと結婚する気は、まるつきり無かったのです。みんなの言う様に、そんな、申しぶんの無かたいお方かただつたら、殊更ことさらに私でなくても、他に佳よいお嫁さんが、いくらでも見つかる事でしょうし、なんだか張り合いの無いことだと思つていました。この世界中に（などと言うと、あなたは、すぐお笑いになります）私でなければ、お嫁に行けないような人のところへ行きたいものだと、私はぼんやり考えて居りました。丁度その時に、あなたのおかげからの、あのお話があつたの

でした。ずいぶん乱暴な話だったので、父も母も、はじめから不機嫌でした。だって、あの骨董屋こつとうやの但馬さんたじまが、父の会社へ画を売りに来て、れいのお喋りしゃべりを、さんざんした揚句の果に、この画の作者は、いまにきつと、ものになります。どうです、お嬢さんを等と不謹慎な冗談を言い出して、父は、いい加減に聞き流し、とにかく画だけは買って会社の応接室の壁に掛けて置いたら、二、三日して、また但馬さんがやって来て、こんどは本気に申し込んだというじゃありませんか。乱暴だわ。お使者の但馬さんも但馬さんなら、その但馬さんにそんな事を頼む男も男だ、と父も母も呆あきれていました。でも、あとで、あなたにお伺いして、それは、あなたの全然ご存じなかった事で、すべては但馬さんの忠義な一存からだだったという事が、わかりました。但馬さんには、ずいぶんお世話になりました。いまの、あ

あなたの御出世も、但馬さんのお蔭よ。本当に、あなたには、商売を離れて尽して下さった。あなたを見込んだというわけね。これからも、但馬さんを忘れては、いけません。あの時、私は但馬さんの無鉄砲な申し込みの話を聞いて、少し驚きながらも、ふつと、あなたにお逢いしてみたくなりました。なんだか、とても嬉<sup>うれ</sup>しかったの。私は、或<sup>あ</sup>る日こっそり父の会社に、あなたの画を見に行きました。その時のことを、あなたにお話し申したかしら。私は父に用事のある振りをして応接室にはいり、ひとりで、つくづくあなたの画を見ました。あの日は、とても寒かった。火の気の無い、広い応接室の隅<sup>すみ</sup>に、ぶるぶる震えながら立って、あなたの画を見ていました。あれは、小さい庭と、日当りのいい縁側の画でした。縁側には、誰も坐<sup>すわ</sup>っていないで、白い座蒲団<sup>ざぶとん</sup>だけが一つ、置かれていました。青と黄色と、白だ

けの画でした。見ているうちに、私は、もつとひどく、立つて居られないくらいに震えて来ました。この画は、私でなければ、わからないのだと思いました。真面目まじめに申し上げているのですから、お笑いになつては、いけません。私は、あの画を見てから、二、三日、夜も昼も、からだが震えてなりませんでした。どうしても、あなたのとこへ、お嫁に行かなければ、と思ひました。蓮葉はすはな事で、からだか燃えるように恥ずかしく思ひましたが、私は母にお願いしました。母は、とても、いやな顔をしました。私はけれども、それは覚悟していた事でしたので、あきらめずに、こんどは直接、但馬さんに御返事いたしました。但馬さんは大声で、えらい！とおっしゃつて立ち上り、椅子に躓つまずいて転びましたが、あの時は、私も但馬さんも、ちつとも笑いませんでした。それからの事は、あなたも、よく御承知おぼの筈で

ございます。私の家では、あなたの評判は、日が経つにつれて、いよいよ悪くなる一方でした。あなたが、瀬戸内海の故郷から、親にも無断で東京へ飛び出して来て、御両親は勿論、親戚の人ことごとくが、あなたに愛想づかしをしている事、お酒を飲む事、展覧会に、いちども出品していない事、左翼らしいという事、美術学校を卒業しているかどうか怪しいという事、その他たくさん、どこで調べて来るのか、父も母も、さまざまの事実を私に言い聞かせて叱りました。けれども、但馬さんの熱心なとりなしで、どうやら見合いまでは漕ぎつけました。千疋屋の二階に、私は母と一緒にまいりました。あなたは、私の思っていたとおりの、おかたでした。ワイシャツの袖口が清潔なのに、感心いたしました。私が、紅茶の皿を持ち上げた時、意地悪くからだが震えて、スプーンが皿の上でかちやかちや鳴って、

ひどく困りました。家へ帰ってから、母は、あなたの悪口を、一そう強く言っていました。あなたが煙草たばこばかり吸って、母には、ろくに話をして上げなかつたのが、何より、いけなかつたようでした。人相が悪い、という事も、しきりに言っていました。見込みがないというのです。けれども私は、あなたのところへ行く事に、きめていました。ひとつき、すねて、とうとう私が勝ちました。但馬さんとも相談して、私は、ほとんど身一つで、あなたのところへ参りました。淀橋よどばしのアパートで暮した二箇年かほど、私にとって楽しい月日つきひは、ありませんでした。毎日、あすの計画で胸が一ぱいでした。あなたは、展覧会にも、大家たいかの名前にも、てんで無関心で、勝手な画ばかり描いていました。貧乏になればなるほど、私はぞくぞく、へんに嬉しくて、質屋にも、古本屋にも、遠い思い出の故郷なつかのような懐し

さを感じました。お金が本当に何も無くなった時には、自分のありつたけの力を、ためす事が出来て、とても張り合いがありました。だって、お金の無い時の食事ほど楽しくて、おいしいのですもの。つぎつぎに私は、いいお料理を、発明したでしょう？ いまは、だめ。なんでも欲しいものを買えると思えば、何の空想も湧いて来ません。市場へ出掛けてみても私は、虚無です。よその叔母さんたちの買うものを、私も同じ様に買って帰るだけです。あなたが急にお偉くなつて、あの淀橋のアパートを引き上げ、この三鷹町みたかの家に住むようになってからは、楽しい事が、なんにもなくなつてしまいました。私の、腕の振いどころが無くなりました。あなたは、急にお口くちもお上手になつて、私を一そう大事にして下さいましたが、私は自身が何だか飼猫のように思われて、いつも困つて居りました。私は、あなた

を、この世で立身なさるおかたとは思わなかつたのです。死ぬまで貧乏で、わがまま勝手な画ばかり描いて、世の中の人みんなに嘲笑ちやうしょうせられて、けれども平気で誰にも頭を下げず、たまには好きなお酒を飲んで一生、俗世間に汚されずに過して行くお方だとばかり思つて居りました。私は、ばかだったのでしようか。でも、ひとりくらいは、この世に、そんな美しい人がいる筈だ、と私は、あの頃も、いまもなお信じて居ります。その人の額ひたいの月桂樹げつけいじゆの冠は、他の誰にも見えないので、きつと馬鹿扱いを受けるでしようし、誰もお嫁に行つてあげてお世話しようともしないでしようから、私が行つて一生お仕えしようと思つていました。私は、あなたこそ、その天使だと思つていました。私でなければ、わからないのだと思つていました。それが、まあ、どうでしょう。急に、何だか、お偉くなつてしまつて。私

は、どういふわけだか、恥ずかしくてたまりません。

私は、あなたの御出世を憎んでいるのではございません。あなた、不思議なほどに哀しい画が、日一日と多くの人に愛さ  
れているのを知つて、私は神様に毎夜お礼を言いました。泣く  
ほど嬉しく思いました。あなたが淀橋のアパートで二年間、気  
のむくままに、好きなアパートの裏庭を描いたり、深夜の新  
宿の街を描いて、お金がまるつきり無くなつた頃には但馬さん  
が来て、二、三枚の画と交換に十分のお金を置いて行くのでし  
たが、あの頃は、あなたは、但馬さんに画を持って行かれる事  
が、ひどく淋さびしい御様子で、お金の事になど、てんで無関心で  
ありました。但馬さんは、来る度毎に私を、こっそり廊下へ呼  
び出して、どうぞ、よろしく、ときまつたように真面目に言つ  
てお辞儀をし、白い角封筒を、私の帯の間につつ込んで下さる

のでした。あなたは、いつでも知らん顔をして居りますし、私  
だって、すぐその角封筒の中味を調べるような卑しい事は致し  
ませんでした。無ければ無いで、やって行こうと思つていたの  
ですもの。いくらいただいた等、あなたに報告した事も、あり  
ません。あなたを汚したくなかつたのです。本当に、私は一度  
だって、あなたに、お金が欲しいの、有名になつて下さいの、と  
お願いした事はございませんでした。あなたのような、口下手  
な、乱暴なおかたは、（ごめんなさい）お金持にもならないし、  
有名になど決してなれるものでないと私は、思つていました。  
けれども、それは、見せかけだったのね。どうして、どうして。  
但馬さんが個展の相談を持つて来られた時から、あなたは、  
何だか、おしやれになりました。まず、歯医者へ通いはじめま  
した。あなたは虫歯が多くて、お笑いになると、まるでおじい

さんのように見えましたが、けれどもあなたは、ちつとも気に  
なさらず、私が、齒医者へおいでになるようにおすすめしても、  
いいよ、齒がみんな無くなりやあ総入齒にするんだ、金齒を光  
らせて女の子に好かれたって仕様が無い、等と冗談ばかりおつ  
しゃつて、一向に齒のお手入れをなさらなかつたのに、どうい  
う風の吹き廻しか、お仕事の合間、合間に、ちよいちよいと出  
かけて行つては、一本二本と、金齒を光らせてお帰りになるよ  
うになりました。こら、笑つてみる、と私が言つたら、あなた  
は、鬚ひげもじゃの顔を赤くして、但馬の奴やつが、うるさく言うんだ、  
と珍しく気弱い口調で弁解なさいました。個展は、私が淀橋へ  
まいりましてから二年目の秋に、ひらかれました。私は、うれ  
しゅうございました。あなたの画が、一人でも多くの人に愛さ  
れるのに、なんで、うれしくない事がありました。私には、先

見の明めいがあつたのですものね。でも、新聞でもあんなに、ひどくほめられるし、出品の画が、全部売り切れたそうですし、有名な大家たいかからも手紙が来ますし、あんまり、よすぎて、私は恐しい気が致しました。会場へ、見に来いと、あなたにも、但馬さんにも、あれほど強く言われましたけれど、私は、全身震えながら、お部屋で編物ばかりしていました。あなたの、あの画が、二十枚も、三十枚も、ずらりと並んで、それを大勢の人たちが、眺ながめている有様を、想像してさえ、私は泣きそうになつてしまいます。こんなに、いい事が、こんなに早く来すぎては、きつと、何か悪い事が起るのだとさえ、考えました。私は、毎夜、神様に、お詫わびを申しました。どうか、もう、幸福は、これだけでたくさんでございませうから、これから後、あの方が病氣などなさらぬよう、悪い事の起らぬよう、お守り下さい、と念

じていました。あなたは毎夜、但馬さんに誘われて、ほうぼうの大家たいかのところへ挨拶あいさつに参ります。翌朝お帰りの事も、ございましたが、私は別に何とも思っていないのに、あなたは、それは精くわしく前夜の事を私に語って下さって、何先生は、どうだとか、あれは愚物だとか、無口なあなたらしくもなく、ずいぶんつまらぬお喋りをはじめます。私は、それまで二年、あなたと暮して、あなたが人の陰口をたたいたのを伺った事が一度もありませんでした。何先生は、どうだつて、あなたは唯我独尊ゆいがどくそんのお態度で、てんで無関心の御様子だったではありませんか。それに、そんなお喋りをして、前夜は、あなたに何のうしろ暗いところも無かったという事を、私に納得させようと、お努めになつて居られるようなのですが、そんな気弱な遠廻しの弁解をなさらずとも、私だつて、まさか、これまで何も知らずに育つ

て来たわけでもございませんし、はつきりおっしゃって下さったほうが、一日くらい苦しくても、あとは私はかえって楽になります。所詮しよせんは生涯の、女房なのですから。私は、そのほうの事では、男の人を、あまり信用して居りませんし、また、滅茶に疑つても居りません。そのほうの事でしたら、私は、ちつとも心配して居りませぬし、また、笑つて泳こらえる事も出来るのですけれど、他に、もつと、つらい事がございます。

私たちは、急にお金持になりました。あなたも、ひどくおいそがしくなりました。二科会から迎えられて、会員になりました。そうして、あなたは、アパートの小さい部屋を、恥ずかしかるようになりました。但馬さんもしきりに引越すようにすすめて、こんなアパートに居るのでは、世の中の信用も如何いかがと思われるし、だいいち画の値段が、いつまでも上りません、一つ

奮発して大きい家を、お借りなさい、と、いやな秘策をさずけ、あなたまで、そりゃあそうだ、こんなアパートに居ると、人が馬鹿にしやがる、等と下品なことを、意気込んで言うので、私は何だか、ぎよつとして、ひどく淋しくなりました。但馬さんは自転車に乗ってほうぼう走り廻り、この三鷹町の家を見つけて下さいました。としの暮に私たちは、ほんのわずかなお道具を持って、この、いやに大きいお家へ引越して参りました。あなたは、私の知らぬ間にデパートへ行つて何やらかやら立派なお道具を、本当にたくさん買い込んで、その荷物が、次々とデパートから配達されて来るので、私は胸がつまって、それから悲しくなりました。これではまるで、そこらにたくさんある当り前の成金なりきんと少しも違っていないのですもの。けれども私は、あなたに悪くて、努めて嬉しそうに、はしゃいでいました。いつの

間にか私は、あの、いやな「奥様」みたいな形になってしまった。あなたは、女中を置こうとさえ言い出しましたけれど、それだけは、私は、何としても、いやで、反対いたしました。私には、人を、使うことが出来ません。引越して来て、すぐにあなたは、年賀状を、移転通知を兼ねて三百枚も刷らせました。三百枚。いつのまに、そんなにお知合いが出来たのでしょうか。私には、あなたが、たいへんな危い綱渡りをはじめているような気がして、恐しくてなりませんでした。いまに、きつと、悪い事が起る。あなたは、そんな俗な交際などなさって、それで成功なさるようなお方では、ありません。そう思つて、私は、ただはらはらして、不安な一日一日を送つていたのでございますが、あなたは躓つまずかぬばかりか、次々と、いい事ばかりが起るのでした。私が間違つているのでしょうか。私の母も、ちよいちよ

い、この家へ訪ねて来るようになって、その度毎に、私の着物やら貯金帳やらを持って来て下さって、とても機嫌きげんがいいのです。父も、会社の応接間の画を、はじめは、いやがつて会社の物置にしまわせていたのだそうですが、こんどは、それを家へ持って来て、額縁も、いいのに変えて、父の書齋に掛けています。だそうです。池袋の大姉さんも、すっかりおやり等と、お手紙を下さるようになりました。お客様も、ずいぶん多くなりました。応接間が、お客様で一ぱいになる事もありました。そんな時、あなたの陽気な笑い声が、お台所まで聞えて来ました。あなたは、ほんとに、お喋りになりました。以前あなたは、あなたに無口だったので、私は、ああ、このおかたは、何もかもわかっていながら、何でも皆つまらないから、一こんなに、いつでも黙って居られるのだ、とばかり思い込んで居りましたが、そ

うでもないらしいのね。あなたは、お客様の前で、とてもつまらない事を、おっしゃって居られます。前の日に、お客様から伺ったばかりの画の論を、そっくりそのまま御自分の意見のようしかつめに鹿爪らしく述べていたり、また、私が小説を読んで感じた事をあなたに、ちよつと申し上げると、あなたはその翌日、すましてお客様に、モオパスサンだつて、やはり信仰には、おびえていたんだね、なんて私の愚論をそのままお聞かせしているものですから、私はお茶を持って応接間にはいりかけて、あまり恥ずかしくて立ちすくんでしまう事もありました。あなたは、以前は、なんにも知らなかったのね。ごめんなさい。私だつて、なんにも、ものを知りませんけれども、自分の言葉だけは、持っているつもりなのに、あなたは、全然、無口か、でもない、人の言つた事ばかりを口真似くちまねしているだけなんですもの。それな

のに、あなたは不思議に成功なさいました。そのとしの二科の画は、新聞社から賞さえもらつて、その新聞には、何だか恥ずかしくて言えないような最大級の讃辞が並べられて居りました。孤高、清貧、思索、憂愁、祈り、シャヴァンヌ、その他いろいろございました。あなたは、あとでお客様とその新聞の記事に就いてお話をされ、割合、當つていたようだね、等と平氣でおつしやつて居られました。まあ何という事を、おつしやるのでしよう。私たちは清貧ではございません。貯金帳を、ごらんにいれましようか。あなたは、この家に引越して来てからは、まるで人が変つたように、お金の事を口になさるようになります。お客様に画をたのまれると、あなたは、必ずお値段の事を悪びれもせず、言い出します。はつきりさせて置いたほうが、後でいざこざが起らなくて、お互に氣持がいいからね、などと、

あなたはお客様におつしやつて居られますが、私はそれを小耳にはさんで、やはり、いやな気が致しました。なんでそんなにお金にこだわるのでしょうか。いい画さえ描いて居れば、暮しのほうは、自然に、どうにかなつて行くものと私には思われます。いいお仕事をなさつて、そうして、誰にも知られず、貧乏で、つつましく暮して行く事ほど、楽しいものはありません。私は、お金も何も欲しくありません。心の中で、遠い大きいプライドを持つて、こつそり生きていたいと思います。あなたは私の、財布の中まで、おしらべになるようになりました。お金がはいると、あなたは、あなたの大きい財布と、それから、私の小さい財布とに、お金をわけて、おいれになります。あなたの財布には、大きいお紙幣さつを五枚ばかり、私の財布には、大きいお紙幣一枚を、四つに畳んでお容れになります。あとのお

金は、郵便局と銀行へ、おあずけになります。私は、いつでも、それを、ただ傍で眺めています。いつか私が、貯金帳をいれてある書棚しよだなの引き出しの鍵かぎを、かけるのを忘れていたら、あなたは、それを見つけて、困るね、と、しんから不機嫌に、私にここごとを言うので、私は、げっそり致しました。画廊へ、お金を受取りにおいでになれば、三日目くらいにお帰りになります。そんな時でも、深夜、酔っつてがらと玄関の戸をあけて、おはいりになるや否や、おい、三百円あまして来たぞ、調べて見なさい、等と悲しい事を、おっしゃいます。あなたのお金ですもの、いくらお使いになつたつて平気ではないでしょうか。たまには気晴しに、うんとお金を使いたくなる事もあるだろうと思います。みんな使うと、私が、がっかりするとでも思つて居られるのでしょうか。私だつて、お金の有難さは存じています

が、でも、その事ばかり考えて生きているのでは、ございませ  
ん。三百円だけ残して、そうして得意顔でお帰りになるあなた  
のお気持が、私には淋しくてなりません。私は、ちつともお金  
を欲しく思っています。何を買いたい、何を食べたい、何を  
観たいとも思いません。家の道具も、たいてい廃物利用で間に  
合わせて居りますし、着物だつて染め直し、縫い直しますから  
一枚も買わずにすみます。どうにでも、私は、やっつて行きます。  
手拭掛てぬぐいかけ一つだつて、私は新しく買うのは、いやです。むだな  
事ですもの。あなたは時々、私を市内へ連れ出して、高い支那  
料理などを、ごちそうして下さいましたが、私にはちつともお  
いしいとは思われませんでした。何だか落ちつかなくて、おつ  
かなびつくりの気持で、本当に、勿体もったいなくて、むだな事だと思  
いました。三百円よりも、支那料理よりも、私には、あなたが、

この家のお庭に、へちまの棚を作つて下さつたほうが、どんなに嬉しいかわかりません。八畳間の縁側には、あんなに西日が強く当るのですから、へちまの棚をお作りになると、きつと工合がいいと思います。あなたは、私があればほどお願いしても、植木屋を呼んだらいいとか、おつしやつて、ご自分で作つては、くださいません。植木屋を呼ぶなんて、そんなお金持の真似は、私は、いやです。あなたに、作つていただきたいのに、あなたは、よし、よし、来年は、等とおつしやるばかりで、とうとう今日まで、作つては下さいません。あなたは、御自分の事では、ひどく、むだ使いをなさるのに、人の事には、いつでも知らん顔をなさつて居ります。いつでしたかしら、お友達の雨宮さんが、奥さんの御病気で困つて、御相談にいらした時、あなたは、わざわざ私を応接間にお呼びになつて、家にいま、お金がある

かい？ と真面目な顔をして、お聞きになるので、私は、可笑しいやら、ばからしいやらで、困ってしまいました。私が顔を赤くして、もじもじしていると、隠すなよ、そこらを搔き廻したら、二十円くらいは出て来るだろう、と私に、からかうようにおっしゃるので、私は、びっくりしてしまいました。たった二十円。私は、あなたの顔を見直しました。あなたは、私の視線を、片手で、払いのけるようにして、いいから僕に貸しておくれ、けちけちするなよ、とおっしゃって、それから雨宮さんのほうに向って、お互、こんな時には、貧乏は、つらいね、と笑っておっしゃるのでした。私は、呆れて、何も申し上げたくなりました。あなたは清貧でも何でも、ありません。憂愁だなんて、いまの、あなたのどこに、そんな美しい影があるのでしよう。あなたは、その反対の、わがままな楽道家です。毎朝、洗

面所で、おいとこそうだよ、なんて大声で歌つて居られるでは、ありませんか。私は御近所に恥ずかしくてなりません。祈り、シヤヴァンヌ、もつたいたいと思います。孤高だなんて、あなたは、お取巻きのかたのお追従ついでの中でだけ生きているのにお気が附かれないのですか。あなたは、家へおいでになるお客様たちには先生と呼ばれて、誰かれの画を、片端からやつつけて、いかにも自分と同じ道を歩むものは誰も無いような事をおっしゃいますが、もし本当にそうお思いなら、そんなに矢鱈やたらに、ひとの悪口をおっしゃつてお客様たちの同意を得る事など、要らないと思います。あなたは、お客様たちから、その場かぎりの御賛成でも得たいのです。なんで孤高な事がありました。そんなに来る人、来る人に感服させなくても、いいじゃありませんか。あなたは、とても嘘うそつきです。昨年、二科から脱退して、新浪

漫派とやらしい団体を、お作りになる時だつて、私は、ひとり  
で、どんなに惨めな思みじいをしていた事でしょう。だつて、あな  
たは、蔭であんなに笑つて、ばかにしていたおかた達ばかりを  
集めて、あの団体を、お作りになつたのでございますもの。あ  
なたには、まるで御定見が、ございませぬ。この世では、やは  
り、あなたのような生きかたが、正しいのでしょうか。葛西かさいさ  
んがいらした時には、お二人で、雨宮さんの悪口をおつしやつ  
て、憤慨したり、嘲笑ちやうしやうしたりして居られますし、雨宮さんがお  
いでの際は、雨宮さんに、とても優しくしてあげて、やつぱり友  
人は君だけだ等と、嘘とは、とても思えないほど感激的におつ  
しやつて、そうして、こんどは葛西さんの御態度に就いて非難  
を、おはじめになるのです。世の中の成功者とは、みんな、あ  
なたのような事をして暮しているものなんでしょうか。よくそ

れで、躓つまずかずに生きて行けるものだど、私は、そら恐しくも、不思議にも思います。きつと、悪い事が起る。起ればいい。あなたのお為にも、神の実証のためにも、何か一つ悪い事が起るように、私の胸のどこかで祈っているほどになってしまいました。けれども、悪い事は起りませんでした。一つも起りません。相変わらず、いい事ばかりが続きます。あなたの団体の、第一回の展覧会は、非常な評判のようでした。あなたのお花の、菊の花の絵は、いよいよ心境が澄み、高潔な愛情が馥郁ふいくと匂におつているとか、お客様たちから、お噂うわさを承りました。どうして、そういう事になるのでしょう。私は、不思議でたまりません。ことしのお正月には、あなたは、あなたの画の最も熱心な支持者だという、あの有名な、岡井先生のところへ、御年始に、はじめて私を連れてまいりました。先生は、あんなに有名な大家たいかなのに、

それでも、私たちの家よりも、小さいくらいのお家に住まわ  
れて居られました。あれで、本当だと思えます。でっぷり太っ  
て居られて、てこでも動かない感じで、あぐらをかいて、そうし  
て眼鏡越しに、じろりと私を見る、あの大きい眼も、本当に孤高  
なお方の眼でございました。私は、あなたの画を、はじめて父  
の会社の寒い応接室で見た時と同じ様に、こまかく、からだが  
震えてなりませんでした。先生は、実に単純な事ばかり、ちつ  
ともこだわらずに、おっしゃいます。私を見て、おう、いい奥  
さんだ、お武家そだちらしいぞ、と冗談をおっしゃったら、あ  
なたは真面目まじめに、はあ、これの母が士族でして、などといかに  
も誇らしげに申しますので、私は冷汗を流しました。母が、な  
んで士族なのですか。父も、母も、ねっからの平民でござい  
ます。そのうちに、あなたは、人におだてられて、これの母は

華族でして、等とおつしやるようになるのではないでしょう。そら恐しい事でございます。先生ほどのおかたでも、あなたの全部のいんちきを見破る事が出来ないとは、不思議であります。世の中は、みんな、そんなものなのではないでしょうか。先生は、あなたの此の頃のお仕事を、さぞ苦しいだろうと言つて、しきりにいたわ労つておいでになりましたが、私は、あなたの毎朝の、おいとこそうだよ、という歌を歌つておいでになるお姿を思い出し、何かなんだか判わからなくなり、しきりに可笑しく、噴き出しそうにさえなりました。先生のお家から出て、一町も歩かないうちに、あなたは砂利を蹴けつて、ちえっ！ 女には、甘くていやがら、とおつしやいましたので、私はびっくり致いたしました。あなたは、卑劣です。たつたいま迄、あの御立派な先生の前で、ぺこぺこしていらした癖に、もうすぐ、そんな陰口をたたくなんて、あ

あなたは、氣違いです。あの時から、私は、あなたと、おわかれしようと思ひました。この上、忪こらえて居る事が出来ませんでした。あなたは、きつと、間違つて居ります。わざわいが、起つてくれたらいい、と思ひます。けれども、やつぱり、悪い事は起りませんでした。あなたは但馬さんの、昔の御恩をさえ忘れた様子で、但馬のばかが、また来やがった、等とお友達におつしやつて、但馬さんも、それを、いつのまにか、ご存じになつたようで、ご自分から、但馬のばかが、また来ましたよ、なんて言つて笑いなから、のこのこ勝手口から、おあがりになりました。もう、あなた達の事は、私には、さつぱり判りません。人間の誇りが、一体、どこへ行つたのでしょうか。おわかれ致します。あなた達みんな、ぐるになつて、私をからかつて居られるような氣さえ致します。先日あなたは、新浪漫派の時局的意義

とやらに就いて、ラジオ放送をなさいました。私が茶の間で夕刊を読んでいたら、不意にあなたのお名前が放送せられ、つづいてあなたのお声が。私には、他人の声のような気が致しました。なんとという不潔に濁った声でしょう。いやな、お人だと思えました。はつきり、あなたという男を、遠くから批判出来ました。あなたは、ただのお人です。これから、ずんずん、うまく、出世をなさるでしょう。くだらない。「私の、こんにち在るは」というお言葉を聞いて、私は、スイッチを切りました。一体、何になつたお積りなのでしょう。恥じて下さい。「こんにち在るは」なんて恐しい無智な言葉は、二度と、ふたたび、おつしやらないで下さい。ああ、あなたは早く躓いたら、いいのだ。私は、あの夜、早く休みました。電気を消して、ひとりで仰向に寝ていると、背筋の下で、こおろぎが懸命に鳴いていました。

縁の下で鳴いているのですけれど、それが、ちょうど私の背筋の真下あたりで鳴いているので、なんだか私の背骨の中で小さいきりぎりすが鳴いているような気がするのでした。この小さい、かす幽かな声を一生忘れずに、背骨にしまつて生きて行こうと思いました。この世では、きつと、あなたが正しくて、私こそ間違っているのだらうとも思いますが、私には、どこが、どんなに間違っているのか、どうしても、わかりません。

## 後註

一 「」は底本では「、」

ぎりぎりす

底本：「きりぎりす」新潮文庫、新潮社

1974（昭和 49）年 9 月 30 日発行

1988（昭和 63）年 3 月 15 日 29 刷改版

2001（平成 13）年 5 月 5 日 53 刷

初出：「新潮」

1940（昭和 15）年 11 月号

入力：土屋隆

校正：鈴木厚司

2005 年 12 月 2 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。